

離島振興開発地域

土地分類基本調査

三根・佐須奈

5 万 分 の 1

国 土 調 査

長 崎 県

1 9 8 4

序 文

国土は国民のための限られた資源であり、その有効利用を図ることが今後ますます要求されております。

本県においても、その恵まれた環境を保全しつつ、地域の特性を生じた土地利用を基本理念として各種の施策を進めているところであります。

本調査はこのような諸施策を進めるのに必要な調査のうち、最も基本的な「地形」「表層地質」「土壌」を主体とする土地条件を科学的、総合的に調査することを目的として、国土調査法に基づく都道府県土地分類基本調査を実施しているものであります。

本県の実施状況は、昭和 48 年度「肥前小浜」「長崎」「大村」、昭和 49 年度「佐世保」「佐世保南部」「早岐（長崎県佐賀県共同）」「呼子・唐津（佐賀県長崎県共同）」「平戸」、昭和 50 年度「神ノ浦」「野母崎」、昭和 51 年度「島原・荒尾」「口之津・三角」、昭和 52 年度「生月・志々伎」、昭和 53 年度「勝本」、昭和 54 年度「三井楽・福江・玉之浦・富江・男島及女島」、昭和 55 年度「有川・漁生浦・佐尾」、昭和 56 年度「肥前江之島・小値賀島・立串・肥前赤島」、昭和 57 年度「厳原」、昭和 58 年度「仁位」、昭和 59 年度「三根」、昭和 60 年度「佐須奈」の調査を実施しており、今回「三根・佐須奈」地域の成果をとりまとめました。

この調査の成果を行政に活用されることはもちろん、広く関係各位に御活用いただければ幸いです。

最後にこの調査の実施にあたり御指導、御助言を賜った国土庁土地局国土調査課をはじめ、調査に直接携わっていただきました調査機関の方々及び、資料収集等積極的にご協力をいただいた各町並びに関係機関の方々にたいし心から謝意を表する次第であります。

昭和 61 年 9 月

長崎県企画部理事

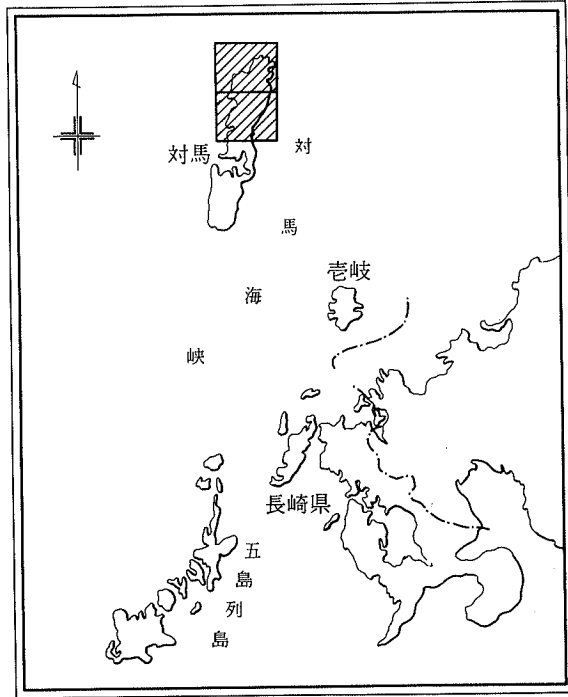
田 中 進

ま え が き

1. 本調査は、長崎県土地分類基本調査作業規程に基づき、長崎県土地対策課が長崎県農林部・長崎大学教育学部等諸機関の協力により実施したもので、調査の事業主体は長崎県である。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
3. 基本調査図は測量法第27条第2項の規定により建設大臣が刊行した5万分の1地形図を使用した。
4. 調査の実施・成果作成の関係機関及び関係担当者は、次のとおりである。

指 導	国土庁土地局国土調査課		
総 括	長崎県企画部土地対策課	課 長	小 川 勉
		主 幹	吉 田 和 人
		技 師	毎 熊 修
地 形 調 査	長崎大学	名誉教授	石 井 泰 義
開発関連調査 (傾斜区分・土地利用現況)			
表層地質調査	長崎大学教育学部	教 授	鎌 田 泰 彦
土 壌 調 査	長崎県総合農林試験場	環境部長	小 野 末 太
	長崎県農林部林務課	副主幹	松 尾 俊 彦
協 力 機 関	長崎県関係各課及び関係地方機関並びに、関係市町村		

位置图



目 次

序 文

まえがき

総 論

I 位置および行政区画	1
1. 位 置	1
2. 行政区画	1
II 地域の特徴	2
1. 自然条件	2
2. 社会経済条件	3
3. 主要産業の概況	5

各 論

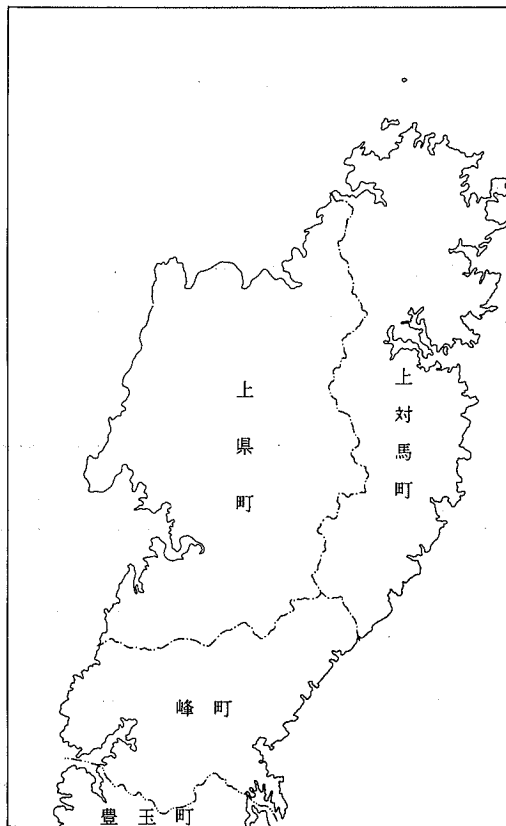
I 地形分類図	9
II 表層地質図	18
III 土 壌 図	26
IV 傾斜区分図	32
V 土地利用現況図	33

總論

1 位置及び行政区画

- 1 位置：「三根・佐須奈」図幅は長崎県の北西，北対馬の北部に位置し，東経 $129^{\circ} 15' 00'' \sim 129^{\circ} 30' 00''$ ，北緯 $34^{\circ} 25' 00'' \sim 34^{\circ} 45' 00''$ の範囲内にあり，図幅内陸地面積は 353.18km^2 である。
- 2 行政区画：本図幅の行政区画は下県郡豊玉町，上県郡峰町，上県町及び上対馬町の4町からなっている。

行政区画図



第1表 図幅内の市町村面積

区分 市町村名	図幅内陸地面積		市町村面積 B	A / B
	実数 A	構成		
豊玉町	14.95 km ²	4.23 %	74.61 km ²	20.0 %
峰町	73.20	20.73	73.20	100.0
上県町	156.81	44.40	156.81	100.0
上対馬町	108.22	30.64	108.22	100.0
計	353.18	100.0	412.84	85.5

(資料) A：長崎県企画部土地対策課調べ B：国土地理院調べ (S 60)

Ⅱ 地域の特性

1 自然条件

ア 気象条件

この地域は対馬海流に囲まれているが、県域北端部に位置するため、気温は年間を通じて長崎より1～2℃低く、平均気温 15.1℃、平均最高気温 19.0℃、平均最低気温 11.5℃となっている。

第2表 月間平均最高気温

単位 ℃

観測月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
厳原	9.9	9.3	12.8	18.9	21.6	24.0	26.8	29.8	26.6	22.0	15.8	10.1	19.0

第3表 月間平均最低気温

単位 ℃

観測月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
厳原	1.7	0.6	5.8	10.2	18.2	17.0	22.2	24.3	20.9	13.8	7.0	1.7	11.5

第4表 月間平均気温

単位 ℃

観測月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
厳原	5.6	4.8	9.1	14.6	17.3	20.3	24.4	26.6	23.5	18.0	11.2	5.8	15.1

第5表 月間降水量

観測月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
巖原	58.5	87.5	205.5	187	177.5	228	391.5	202	608.5	128.5	36	36	2346.5

昭和58年1月～12月 (資料) 長崎県統計年鑑(60)

イ 土地利用の現況

図幅内関係市町村の土地利用現況の特色として、山林が約84.5%を占めていて耕地がわずかに2.4%であることがあげられる。また、耕地についても、傾斜15度以上の急傾斜地が占める割合が多く、分散している。

第6表 土地利用現況

市町村名	土地面積 A (ha)	耕地面積 (ha)					耕地率 A/B (%)	森林面積 C (ha)	森林率 C/A (%)
		田	畑	樹園地	牧草地	計 B			
豊玉町	7461	107	127	20	12	266	3.6	6548	87.8
峰町	7320	96	78	4	11	189	2.6	5227	71.4
上県町	15681	190	162	17	6	375	2.4	13971	89.1
上対馬町	10822	22	131	15	6	174	1.6	9134	84.4
計	41284	415	498	56	35	1004	2.4	34880	84.5
構成比%	100.0	1.0	1.2	0.1	0.1	2.4		84.5	

(資料) 長崎県の林業統計 (S 60)

長崎県農林水産統計年報 (S 59～60)

2 社会経済条件

ア 交通

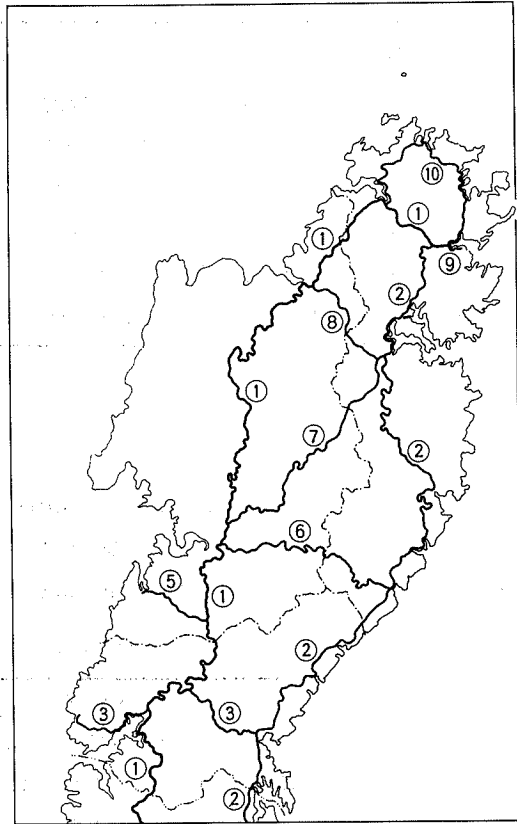
対馬と本土との交通は会場交通と空路により結ばれ、図幅内の地域には国道1本と9本の県道が整備されている。

(1) 道路

番号	区分	路線名	起点	終点
1	国道	382号線	上対馬町	呼子市

2	主要地方道	上対馬豊玉線	上対馬町	豊玉町
3	〃	木坂佐賀線	峰町	峰町
4	一般県道	仁位港線	豊玉町	豊玉町
5	〃	鹿見港線	上県町	上県町
6	〃	上県小鹿港線	上県町	上対馬町
7	〃	舟志宮原線	上対馬線	上県町
8	〃	舟志佐須奈線	上対馬町	上対馬町
9	〃	比田勝港線	上対馬町	上対馬町
10	〃	大浦比田勝線	上対馬町	上対馬町
② 航 路				
1	博多～(郷ノ浦町)～巖原		定期フェリー	
2	小倉～比田勝		〃	
③ 空 路				
1	対馬～福岡		定期空路	
2	対馬～彦岐(～長崎)		〃	

道路位置図



イ 人 口

関係市町村の人口は、昭和60年21,592人であり、人口密度は1km²当たり52.3人で、長崎県平均387.7人に比べ非常に低い。

人口の推移を見ると年々減少していることがわかる。

第7表 関係市町村の人口の推移

単位：人

年次 市町村名	40年	45年	50年	55年	60年	人口密度(55) 人/km ²
豊玉町	7,202	6,294	5,790	5,604	5,402	72.4
峰町	5,597	4,720	4,277	4,042	3,805	52.0
上県町	8,014	7,131	6,035	5,915	5,719	36.5
上対馬町	10,003	8,793	7,943	7,303	6,666	61.6
計	30,816	26,938	24,050	22,864	21,592	52.3
長崎県計	1,641,245	1,570,245	1,571,912	1,590,564	1,593,966	387.7

(資料) 長崎県統計年鑑 (S 60)

3 産業の概況

図幅内関係市町村の就業人口は、昭和55年10,705人で、産業別就業人口構成を見ると、第一次産業43.7%、第二次産業17.1%、第三次産業39.2%となっており、第一次産業のうち漁業就業者が占める割合が非常に高いことが特色である。

第8表 産業別就業人口の構成

単位：人 (S 55 調べ)

産業別 市町村名	総数	第一次産業				第二次産業				第三次 産業	その他
		計	農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業		
豊玉町	2526	1339	193	27	1119	383	-	291	92	802	2
峰町	1802	748	256	27	465	369	4	289	76	685	-
上県町	2933	1310	641	117	552	625	-	527	98	998	-
上対馬町	3444	1277	211	93	973	451	-	325	126	1716	-
計	10,705	4,674	1,301	264	3,109	1,828	4	1,432	392	4,201	2
構成比%	100	43.7	12.2	2.5	29.0	17.1	0	13.4	3.7	39.2	0
長崎県計	702887	134742	95509	1020	38213	166569	4585	71578	90406	401266	310
県全体に 占める割合 (%)	1.5	3.5	1.4	25.9	8.1	1.1	0.1	2.0	0.4	1.0	0.6

(資料) 長崎県統計年鑑 (S 60)

第9表 主要産業の状況

(S 58調べ)

産業別 市町村名	農 業			漁 業		製 造 業			商 業	
	農家 戸数	内 専業	粗生 産額	経営 体数	総漁 獲量	事業 所数	従業 員数	出荷 額	商店 数	年 間 販売額
豊玉町	456	15	199	414	7,035	5	49	953	91	2,397
峰町	311	17	154	313	2,670	5	53	685	81	2,421
上県町	637	59	286	450	2,734	5	51	660	106	2,735
上対馬町	349	5	112	517	6,466	6	56	910	159	6,732
計	1,753	96	751	1,694	18,905	21	209	3,208	437	14,285
長崎県計	75,654	13,290	18,483	17,892	919,041	3,107	75,663	120,724	29,152	2,926,848
県全体に 占める割 合 (%)	2.3	0.1	0.4	9.5	2.1	0.7	0.3	0.3	1.5	0.1

(資料) 長崎農林水産統計年報

長崎県の工業 (S 59)

長崎県の商業 (S 60)

長崎県水産部漁港港勢調査表 (S 59)

農家戸数・専業数については、長崎県統計年鑑 (S 60)

生産額，出荷額，販売額の単位は百万円。

各 論

I 地形分類図

1 地形の概要

本図は5万分の1地形図「^{さすな}佐須奈」図幅と「^{みね}三根」図幅をつなぎ合せて、1図としたもので、その範囲は対馬島の北部を占める。

山地は中央部の御岳（雄岳・460 m）を最高峰とし、中央部には中起伏量を示す山地が広範に分布し、中央部から南北に向けて山地の高度も起伏量も低くなっている。佐護川～芦見川を結ぶ線、三根川下流ならびにその支谷・佐賀ノ内川と櫛浦を結ぶ線によって中央山地・北部山地・南部山地に区分されるのである。また下県山地と同じく東北～西南乃至西北～南東方向の谷の発達が著しく、一般に谷壁は急傾斜を呈するが、山頂部には山稜線に沿って緩傾斜面が細く紐状に発達している。

山地の東西両海岸には丘陵地を伴い、これらの丘陵地は明瞭な鞍部によって山地から区分される。また、三根・仁位・佐護・舟志の諸河川には小規模ながら河岸段丘が分布し、東海岸や北海岸には海岸段丘がみられ、特に北端部にその発達が著しい。

河川は東流する河川が西流河川に較べて短小で、山地を東西に2分する主分水界は東側にシフト（shift）して偏在する。また、谷底低地には砂礫の供給が大きく、河川は水無川の性格を帯びているものが多い。

上に述べた地形の性状を細説するため、次の地形区を設定した。

地形区分

I 山地・山麓地

I a ・下県南部山地

I a - 1 ・白椿山山地

I a - 2 ・黒隈山山地

I a - 3 ・天神山山地

I b ・上県中央山地

I b - 1 ・上県東南中央山地

I b - 1 - A ・鳴滝山山地

I b - 1 - B ・梶木山山地

I b - 1 - C ・鹿ノ内山山地

I b-1-D・大星山山地

I b-2・上県西北中央山地

I b-2-A・御岳山地

I b-2-B・太田隈山山地

I b-2-C・七本松山山地

I c・上県北部山地

I c-1・香ノ木山山地

I c-1-A・大久間山山地

I c-1-B・小白岳山地

I c-1-C・千俵蒔山山地

I c-2・玖須山地

I c-3・加治我祖山地

II 丘陵地

II a・上県南部丘陵地

II a-1・上県南部東岸丘陵地

II a-2・上県南部西岸丘陵地

II b・上県中央丘陵地

II b-1・上県中央東岸丘陵地

II b-2・上県中央西岸丘陵地

II c・上県北部丘陵地

II c-1・上県北部東岸丘陵地

II c-2・上県北部西岸丘陵地

III 台地・段丘

III a・三根川河岸段丘

III b・仁田川河岸段丘

III c・佐護川河岸段丘

III d・舟志川河岸段丘

III e・上県北東部海岸段丘

III f・上県北端海岸段丘

Ⅳ 低地

Ⅳ a ・上県南部低地

Ⅳ a - 1 ・上県南部東岸低地

Ⅳ a - 2 ・上県南部西岸低地

Ⅳ b ・上県中央低地

Ⅳ b - 1 ・上県中央東岸低地

Ⅳ b - 2 ・上県中央西岸低地

Ⅳ c ・上県北部低地

Ⅳ c - 1 ・上県北部東岸低地

Ⅳ c - 2 ・上県北部西岸低地

2 地形細説

2-1 山地・山麓地（Ⅰ）

この図に示される山地は上県山地に属し、南部では、三根川下流から三根湾に至る東北—西南方向の線と佐賀ノ内川（三根川の支流）から櫛浦に至る西北—東南方向の線上の折線が上県南部山地（Ⅰ a）と上県中央山地（Ⅰ b）とを区切る境界線をなし、北部では佐護川と芦見川を結ぶ西北—東南方向の線が上県中央山地（Ⅰ b）と上県北部山地との境界線をなしている。

2-1-1 上県南部山地（Ⅰ a）

この山地は、西北—東南方向の吉田川—曾川線及び田ノ浦—鑓川線によって白樺山山地（Ⅰ a - 1）・黒隈山山地（Ⅰ a - 2）・天神山山地（Ⅰ a - 3）に区分される。いずれも小起伏量を示し、各山地の境界をなす顕著な河谷は、これに直交する東北—西南方向の支谷を生じ、更にその支谷に直交する第二次支谷を生じて複雑な谷模様が見られる。本川や第一次支谷の谷壁は急傾斜を示すが、第二次乃至第三次の支谷の周辺は小さな盆地状地形を呈するのが一般である。ヤマノウシロ川はその本川である佐賀ノ内川とは正反対の流路をとる前輪廻の河谷である。この特性は南部山地だけでなく上県中央山地（Ⅰ b）上県北部山地（Ⅰ c）にも共通するものとみてよい。従って、山地内の山頂部は細長い緩傾斜面をなす山稜線によってお互に結ばれているものが多い。白樺山山地（Ⅰ a - 1）では、標高 230 m内外の白樺山と合戸山及び東南部の

標高 100 m内外の舟沢山・高溜山や茅床坂は巾のせまい緩傾斜面から成る山稜線によって結ばれている。緩傾斜の山頂部が準平原の遺物であると推定される所以である。これもまた、上県山地の全範にわたる特性である。黒隈山地 (I a-2) では黒隈山から神ノ山・悪代山・竹無山・浜ノ背山・在家山へと標高は 240 m から 165 m へと次第に低位するが、緩傾斜面を示す山稜線によって結ばれているのである。天神山山地 (I a-3) は、田ノ浜の南に、僅かにその東北端がみられ、標高 100~150 m の山頂平坦面が指摘される。

2-1-2 上県中央山地 (I b)

本図の中央部を広く占める山地で、北は、西北—東南方向に走る佐護—芦見線によって上県北部山地に接し、南は、三根湾—佐賀ノ内—櫛を結ぶ折線によって上県南部山地に接する。上県中央山地は西北—東南方向の仏坂川 (銅所川支谷) —志多留川線によって上県東南中央山地 (I b-1) と上県西北中央山地 (I b-2) に区分される。

上県東南中央山地 (I b-1)

上県東南中央山地は、さらに仏坂川—志多留川線 (西北—東南方向) を境に北部の鳴滝山山地 (I b-1-A) ならびに梶ノ木山山地 (I b-1-B) と南部の鹿ノ内山地 (I b-1-C) ならびに大星山山地 (I b-1-D) に区分される。

北部・鳴滝山山地 (I b-1-A) では、白杵谷 (目保呂川) を境に北側では小起伏量、南側では中起伏量が示され、鳴滝山 (342 m) ・丸倉山 (260 m) ・亀ノ岳 (244 m) などが分布している。銅所川本川の南・梶木山山地 (I b-1-B) では、小鹿川以西で中起伏量が示され、ハナタカ山 (321 m) ・梶木山 (340 m) ・神山 (344 m) が分布し、小鹿川以東や小鹿から志越にかけての海岸に迫る山地では小起伏量となり、標高も低位する。

南部では、三根川本川 (東北—西南方向) を境に、西側の鹿ノ内山地 (I b-1-C) と東側の大星山山地 (I b-1-D) とに区分され、鹿ノ内山地 (I b-1-C) では、山田山と高野山との間に南北に走る直線状の断層線谷が発達し、東側の高野山 (351 m) 周辺では中起伏量が示され、西側では山田山・鹿ノ内山付近で中起伏量が示されるが大半は小起伏山地によって占められている。大星山山地 (I b-1-D) では大星山付近で中起伏量が示されるが大半は小起伏山地を呈している。

上県西北中央山地 (I b-2)

仁田川以西の上県西北中央山地は、南北方向に走る直線状の断層線谷である田ノ内川(佐護川支谷)一宮原川(仁田川支谷)線によって御岳山地(I b-2-A)と太田隈山山地(I b-2-B)とに区分される。田ノ内川一宮原川の断層線谷は、仁田川下流において齟齬しながらも、その南方の山田山と高野山の間を走る直線状の断層線谷に続いている。上県山地では東北一西南方向の断層線を軸に、西北一東南方向の断層線が斜交しているのが一般的であるのに対して、ここでの南北方向の断層線が齟齬しながらも連続しているのは特異な地形的所在として指摘される。さて、御岳山地(I b-2-A)は本図中の最高峰・雄岳(460m)を有する中起伏山地で雌岳～雄岳から平岳にかけての山頂部には山頂平坦面が残存している。このことは他の上県山地におけると同様であるが、準平原面の遺物としては最高位を占める。中岳山地に接する太田隈山山地(I b-2-B)では、小起伏量が大半で、太田隈山などの残丘は付近で局地的に中起伏量を示している。中山川一志多留川線以西では、後述の大保家丘陵地を挟んで、中起伏量を示す七本松山山地(I b-2-C)が所在し、上県北部山地の千俵蔦山山地に対比される。

2-1-3 上県北部山地 (I c)

上県北部山地は佐護一芦見線を境に上県中央山地に接し、山地の主軸は東北一西南方向に走るが、西北一東南方向の佐須奈一中原線、大浦一比田勝線によって香ノ木山地(I c-1)、佐須奈山地(I c-2)、加治我岨(I c-3)に区分される。香ノ木山山地(I c-1)は舟志一芦見河内線によって西側の大久間山山地(I c-1-A)、千俵蔦山山地(I c-1-C)と東側の小白岳山地(I c-1-B)に区分される。佐久間山山地(I c-1-A)では、香ノ木(287m)の南方で中起伏量を占すが、大半は小起伏山地を呈する。大地一深山線以西では、佐須奈湾と仁田内の間介在する丘陵地をへだてて千俵蔦山山地(I c-1-C)が孤立し、丘陵性の中起伏山地として指摘され、山頂部には平坦面が残存する。小白岳山地(I c-1-B)では、小白岳の西側では中起伏量、東側では小起伏量を示している。

2-2 丘陵地 (II)

2-2-1 上県南部丘陵地 (II a)

上県南部山地(I a)の東海岸には曾浦・櫛浦をかこんで半島をなす上県南部東

岸丘陵地 (Ⅱ a-1)があり、曾浦の東では、起伏量 100 m以上の丘陵地、櫛浦の北には、起伏量 100 m以下の丘陵地が半島を形成、海食崖や海食棚を伴っている。上県南部西岸丘陵地 (Ⅱ a-2)には田ノ浜・大綱間の半島部で起伏量 100 m以上の丘陵地をなし、丘陵上には明瞭な平坦面が指摘される。カニヤリ浦・銘浦・綱浦の防波堤をなす綱島は 100 m以下の丘陵地をなす。銘浦以北の半島先端部及び綱島西岸には海食崖の発達が著しい。

2-2-2 上県中央丘陵地 (Ⅱ b)

上県中央山地 (Ⅰ b)の東岸には舟志から佐賀浦にかけて上県中央山地から鞍部によって隔てられた上県中央東岸丘陵地 (Ⅰ b-1)があり、舟志から堂坂の鞍部を経て琴に至る線の東側では起伏量 100 m以上の丘陵地で、その先端部・五根緒一茂木一郷ノ浦を結ぶ線の東側で小半島をなす部分は起伏量 100 m以下の丘陵地、さらに南の琴一芦見一重一小鹿を結ぶ線の東側では起伏量 100 m以上の丘陵地をなし、丘陵地先端の半島部は浸食されてほとんど消失し、標高 40 mに及ぶ海食崖の発達が著しい。志越から志多賀さらに鞍部をなす地藏峠を越え佐賀に至る線の東側には、起伏量 100 m以上の丘陵地があり、ここでも丘陵地の先端部は消失し標高 40 mに及ぶ海食崖が連続している。

上県中央山地の西岸には、佐護川の支流・中山川から志多留、さらに仁田川の河口及び久原・津柳を経て、三根湾の湾口の狩尾を結ぶ線の西側に配列する上県中央西岸丘陵地 (Ⅱ b-2)がある。深山一志多留線以北では、起伏量 100 m以上を示す大保家丘陵地が東北一西南方向に発達、西南端の田ノ浜では丘陵地内に小盆地が形成され、伊奈崎では風隙 (wind gap)の地形がみられる。大保家丘陵地の北には七本松山山地 (Ⅰ b-2-1C)を介して湊丘陵地が半島状をなし、ここでは典型的なケスタ地形を呈している。志多留から仁田湾北岸の犬ヶ浦にかけての丘陵地は、志多留一伊奈一越高一犬ヶ浦を結ぶ線で明瞭な鞍部によって太田隈山山地 (Ⅰ b-2-1B)と接する半島部をなし起伏量は 100~140 mで丘陵上には準平坦面が残存する。仁田湾から三根湾に至る海岸丘陵地を起伏量 100 m以上を示し、丘陵上には準平坦面があり鹿見・津柳・青海の各集落の北側では、丘陵の山稜から南側は極めて緩傾斜で、北側は急傾斜を示すケスタ地形へ移行している。また、鹿ノ内山地 (Ⅰ b-1-1C)との間には明瞭な鞍部がある。

2-2-3 上県北部丘陵地 (Ⅱc)

上県北部丘陵地は東・西両岸の丘陵地に区分され**上県北部東岸丘陵地 (Ⅱc-1)**は、比田勝港の北に権現山(183m)丘陵地が100m以上の起伏量を有し、山頂平坦面上にはロラン局があり、山麓は段丘に移行している。比田勝からオロン岳にかけての丘陵地は100m以上の起伏量を示し半島部を形成、半島の先端部では起伏量100m以下の丘陵地さらに段丘面へと移行する。玖須山地(Ⅱc-2)との境界部の鳴滝付近では小盆地が形成され、河川争奪による鳴滝の急湍がみられる。舟志湾内で半島状をなす大増東部の丘陵地は小起伏の丘陵地で先端部にオメガ局がある。舟志湾南岸の丘陵地は100m以上の起伏量を示し名方浦・五根緒付近で小起伏の丘陵地となっている。さらに南では、小白岳山地(Ⅱc-1-B)の東に接する起伏量100m以上を示す丘陵地が、先端部に小起伏の丘陵地や海岸段丘を伴って分布している。**上県北部西岸丘陵地 (Ⅱc-2)**は、鰐浦一千ノ浜・河内一佐須奈・大地一深山を結ぶ東北一西南方向の線以西の丘陵地で、大浦・佐須奈の湾内によって3つに分かれる。いずれも起伏量100m以下を示している。なお、上県北部西岸丘陵地は既述の上県中央西岸丘陵地に含まれる大保家丘陵地に連続する東北一西南方向の丘陵地である。

2-3 台地・段丘 (Ⅲ)

三根川の下流及びその支流・佐賀内川には、小規模ながら**三根川河岸段丘 (Ⅲa)**が発達し、吉田川では吉田付近に僅かな低位段丘がみられる。仁田川及び銅所川では**仁田川河岸段丘 (Ⅲb)**が上流部から下流部にかけて、比高10m内外の低位な段丘面として、断片的に発達し、支流には全く見られない。支流はむしろ不協和合流に近い。**佐護川河岸段丘 (Ⅲc)**は、佐護川及びその支流・田ノ内川の本川沿岸に発達、これらの二次的支流には全く段丘を欠いている。**舟志川河岸段丘 (Ⅲd)**は、舟志川の中・下流に小規模に散在、佐須奈川中・下流にも小規模ながら段丘が指摘される。

上県北東部海岸段丘 (Ⅲe)は、上県北部の比田勝港から芦見の海岸部に発達する段丘で、舟志湾以北では尉殿崎^{じょうどん}を中心に網代・唐舟志にかけて標高20~60mの海岸段丘が発達し、舟志湾以南では、志崎・塔ノ鼻・茂木崎・郷ノ浦・浅黄崎にかけて標高40m内外の海岸段丘が発達、海食棚に移行しているが、特にスキノ崎以南では海食崖の発達が著しく、海岸段丘の著しい消失が推定される。比田勝港以北の**上県一北端段丘 (Ⅲf)**は、権現山丘陵地の南では西泊の半島部に東側を波蝕された標高20

m内外の段丘，東では北側を波蝕された標高20mの殿崎段丘，北には舌崎浦にかけて標高20～30 mの段丘が，泉湾内の志古島の段丘に対比され，泉一豊一鰐浦を線の北側では標高20～40 mの段丘面を形成し，発達著しい海食棚に移行している。さらに北に浮ぶ海菜島も標高20 m内外の段丘の島である。

2-4 低地(Ⅳ)

上県の低地は，細長い侵食谷を主とする谷底低地で，下流部に僅かに海岸低地を伴うにすぎない。なお，谷底低地には砂礫の供給が著しく，中・下流部の谷底低地では，ワジ(wadi)の状態を示すのが一般的で対馬低地の特性をなしている。

この図内での**上県南部東岸低地(Ⅳ a-1)**では，櫛川や佐賀ノ内川・吉田川の支流に細長い谷底低地が紐状にみられるほかには低地に乏しい。**上県南部西岸低地(Ⅳ a-2)**では，吉田川・田ノ浜川の紐状低地のほか賀佐・田ノ浜浜に小規模な海岸低地がある。**上県中央東岸低地(Ⅳ b-1)**は芦見川・一重川・小鹿川・三浦川・志越川・志多賀川・佐賀川・駄道川の谷底低地のほか海岸には海食崖が連続して発達，海岸低地に恵まれていない。**上県中央西岸低地(Ⅳ b-2)**には，笹入蛇行する仁田川・飼所川・三根川・佐護川の本流及び支谷の谷底低地が発達，河口には海岸低地がみられ，流入する湾内での砂礫埋積は著しく新しい砂州の形成過程にある。仁田川上流部で大矢谷ほか二川の合流する所に芦見河内の小盆地が佐護川の支流・中山川の上流中山では前輪廻の地形を暗示する盆地が形成されている。田ノ浜・志多留・伊奈・越高・犬浦・鹿見・^{うなづ}女連・津柳・青海・木坂には小規模な谷底低地に僅かな海岸低地を伴っている。中でも田ノ浜低地は盆地状をなし，特異な形態と形成過程を有する。また，佐護川・仁田川・三根川は砂礫の流出が多く河口に砂州の発達が著しく，湾奥部の深度は次第に浅くなっている。**上県北部東岸低地(Ⅳ c-1)**には比田勝川・津和川・玖須川・中原川・舟志川・琴川の本流が西北一東南方向に谷底低地を形成，佐護川の支流をはじめその他の各支流は，これに直交乃至斜交する東北一西南方向をとるものが多い。**上県西岸低地(Ⅳ c-2)**も大浦川・佐須川などが西北一南東方向の谷底低地を形成，支流は佐護川の支流と共に略 東北一西南方向の小さな谷底低地を形成している。

(長崎大学名誉教授 石井泰義)

(参 考 文 献)

- 佐藤 久・(1953年)・対馬の地形「対馬の自然と文化」P 2～P 25(九学会連
合対馬共同調査委員会)
- 田山 利三郎・(1953年)・対馬の海岸ならびに海岸地形概観「前掲書」P 6～P 20
(九学会連合対馬共同調査委員会)
- 石井 泰義・(1962年)・対馬の地形調査—山地侵食に関する問題点とその課題—
「対馬学術調査報告書」P 35～P 50(長崎県)
- 鎌田 泰彦・(1963年)・対馬の地質概説「長崎県理科教育資料第5集」P 3～P 19
(長崎県理科教育協会)
- 坂本 峻雄・(1965年)・壱岐・対馬の地質「壱岐・対馬自然公園学術調査報告書」
P 9～P 25(日本自然保護協会)
- 石井泰義・鎌田泰彦・(1965年)・壱岐及び対馬の地形と地質「前掲書」P 29～P 44
(日本自然保護協会)